送る

校長　山田　浩之

手元にある広辞苑で「送る」を引くと、その項目の一つに「かえす。むくいる。つぐなう。」という意味が記されています。また、「恩を送る」という言葉をインターネットで引くと、元々は「恩を返す」と同じ意味だったが、最近は「受けた恩を他人に送って繋いでいく」という意味に使われることが多いと記されているところもあります。

二月の末に、「六年生ありがとう週間」がありました。六年生への感謝の言葉を記した掲示物を掲げたり、６年生と一緒に遊ぶ時間を設けたりしました。フィナーレでは、各学年が作ったビデオ動画が放送され、全校の子どもが縦割り班で集まり、視聴しました。そのビデオ動画には、六年生の活躍をたたえ、お世話をしてもらったり、リーダーとして様々な活動を取り仕切ってもらったりしたことへの感謝の言葉が、連なりました。ある意味、恩返しの瞬間でもあります。それらを見ていた多くの六年生は、少し誇らしそうな、満足した顔をしていました。

同時にビデオ動画には、五年生が、六年生のこれまでの姿を追って、来年度、最高学年として頑張っていく旨の言葉も発せられました。

ほかにも、一年生から五年生が同じ縦割り班の六年生にメッセージカードを送る活動もありました。いくつかカードを見てみると、次のようなメッセージが見られました。

●いつもみんなに指示を出していて「さすが、六年生」と思っていました。来年は、それを手本にしてかっこいい六年生になりたいです。

●テキパキそうじをしているところがすごいと思いました。私も〇〇さんみたいにテキパキできるようになりたいです。

●いつもありがとうございました。とても元気でみんなをはげましたり、みんなをちゃんとまとめたりしているのでみならいたいです。

どれも、感謝と称賛の言葉に溢れていますが、それだけでなく、六年生への憧れとともに自分も六年生のようになりたいと思っている子どももいるようです。

六年生から受けた恩や見習ったことを、今度は自分が実行し、下の学年に送っていく。学校の文化が繋がっていく仕組みがここにあります。

卒業式、様々な思いが込められて卒業生は送られていきます。